

2020（令和2）年度 相模女子大学・相模女子大学短期大学部 発想賞

本学はスローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」を掲げ、「見つける」力としての発想力育成に取り組んでいます。この賞は、卒業研究・卒業制作等の学業の成果においてすぐれた「発想」をした学生を表彰するものです。

相模女子大学発想賞

黒松 百花 （日本語日本文学科）

夏目漱石『明暗』論 －「津田」と「二人の女性」をめぐって－

黒松さんが研究の対象として選んだのは、夏目漱石の最後にして最大の作品『明暗』です。それまでの漱石作品の女性主人公は、男性側の視点から眺められるばかりでその内面は謎めいたものとして描かれていましたが、『明暗』では、主人公津田の妻お延の心理が生き生きと克明に捉えられており、まったく異なる次元で構想されていることがはっきりとわかる作品です。ところがこの畢生の意欲作は作者の死によって未完に終わりました。もしこれが書き継がれれば近代人をエゴイズムから救う「則天去私」の思想が語られたはずだとの伝説まで生まれましたが、未完ゆえに『明暗』は論じられにくい作品となりました。そんな中、1990年に水村美苗によって発表された『続明暗』は、漱石を思わせる文体と用語により、今までの展開や漱石作品の基本パターンを踏まえた結末を描いて世の喝采を浴びました。

しかし約30年後の今日、黒松さんの精緻な作品分析に基づく考察が導いたのは、『続明暗』以降、それ以外の結末を想像することすらしなくなってきた作品の異なるあり方でした。黒松さんの作品理解と比較すれば、『続明暗』は女性主人公を死と絶望へと追いやる漱石初期作品の特色が色濃いものであったことが見えてきます。黒松さんはまず主人公津田の周辺人物との関りを分析し、彼の行動様式と傾向を明らかにすることを通じ、お延と結婚する前に恋人であった清子がなぜ彼のもとを去ったのか、津田の執着の中心にある作中最大の謎を解き明かしました。そのうえで先行研究ではほぼ注目されてこなかった複数の「手紙」の内容と役割に着目し、説得力ある分析と考察を通じて津田とお延との再生の物語を読みだしています。漱石が書きえなかった小説の領域を学術的な方法とアプローチにより「発想」した見事な卒業論文でした。

上野 桃実 （英語文化コミュニケーション学科）

女子大生のリーダーシップ論 ～女子大学と共学大学における比較研究～

本学生の卒業論文は、女子学生のリーダーシップ育成について女子大学と共学での環境差異の影響について独自のアンケート調査とデータ分析を行い、女子大学でのリーダーシップ育成には周囲との配慮や気配りなど、同性同士の環境に見合った指導などを行うべきとの考察が得られたものである。また本研究活動はゼミ活動で習得した、自ら課題を見出し、それに対する自分の考察をまとめられる力が充分に發揮されたものであり、独自の視点と堅実なデータ取得と分析はユニークである。また、リーダーシップ育成プログラムは多くの大学で取り組んでおり、本校でも取り組むべき課題と考え、論文として共同執筆し、本学学科の紀要に投稿するに至った。

山口 真奈 (子ども教育学科)

子どもはなぜ絵を描くのか — “自分なりに表現する”ことの意味を問う—

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の5領域「表現」において、「自分なりに表現する」ということの重要性が謳われているにもかかわらず、保育現場では、保育者が保護者の評判や絵の出来栄えを気にかけ、保育者が描いてもらいたいと思う絵を子どもに描かせ、子どもの「自分なりの表現」が尊重されていないという現状がある。本論文は保育現場において子どもが「自分なりに表現する」ということをいかに保障することができるかについて、その方策を追究することを目的としたものである。方策を追究するにあたり、「自分なりに表現する」ということの意味付けを、5領域「表現」の目標に頼ることなく、「ヒトはなぜ絵を描くのか」という人類の絵の原初とその変遷から人間が絵を描くことの意義を分析し、それを理論的根拠として明らかにしている点に本論文のオリジナリティがあり、発想のおもしろさが認められる。

松井 萌花 (メディア情報学科)

秦野市の魅力を再確認し愛着度向上を図る「はだのかるた」のデザイン

学生生活の活動の中で、街の人との関わりや、地域の魅力発信に興味を持つようになり、自分が住む「秦野市」のPRができる「はだのかるた」のデザインを卒業研究・制作として取り組んだ。

膨大な取材・調査データを整理し、魅力を感じ取れる、観光スポット、特産物の情報を盛り込んだ「読み札」の詩を書いた。また、原色を避けた明るい色をベースとした「絵札」研究の中で発見した魅力を伝えようと子どもから大人まで遊べるように柔らかいタッチのイラストで表現した。レイアウトを工夫し試作を繰り返しながら完成させたことは高く評価する。

これらの成果は、メディア情報学科で学んだ授業、プロジェクトでの知識、経験から養われたものであり、感性豊かな作品は作者自身の発想力に基づくものと考えられる。

塩塚 みのり (生活デザイン学科)

遊べる非常食用段ボール箱 asobo-ru(あそぼーる)

デザインプロジェクトⅡ-I・Ⅱ(卒業制作)において、災害支援物資をストックする梱包箱の新しい活用法の提案を行い、最優秀賞として評価された。

有事にて避難してきた人々にとって、子供のケアは忘れられがちである。廃棄処分されるだけの梱包材を、見過ごされがちな余暇活動を促す副産物として転用する着眼点は、柔軟かつ発想力によるものである。また大袈裟な仕掛けではなく、さりげなく被災者の心に寄り添えるデザインに仕上げている点は、堅実に積み重ねた検証力によるもので、その完成度は高く、現実的に商品化される可能性が高いものと評価している。

池田 日向 (社会マネジメント学科)

理想の男性像・女性像における矛盾

本学生は3年次よりテレビ番組やHP、SNSにおける言説や、調査票調査およびインタビュー調査の結果をもとに、現代の日本社会で語られる「理想の男性像」「理想の女性像」が具体的にどのような条件によって成り立っているのかを網羅的に検討してきた。そして、卒業論文に

おいて「理想の男性像」「理想の女性像」をめぐる様々な条件には互いに整合性があるのかという観点から分析した。その結果、様々なメディアで提示される理想の男性像・女性像の条件には矛盾する点が含まれていることや、1人の人の語りの中でも揺れ動きがみられることが示された。こうした結果は、現代の女性や男性に寄せられる期待が矛盾や葛藤を含んだものであることを示唆するものであるという結論を導き出すにいたった。

下村 爽香（人間心理学科）

発達障害の学生に関する就労支援の課題 本人インタビューを通じて

本学生は、2019年度に子育て支援センターで開催され、文部科学省実践研究の一環ともなった知的障害の勤労青年と本学学生の合同プログラム「インクルーシブ・ゼミ」に参加し、2020年2月に開催された文部科学省事業「共に学び、生きるコンファレンス」ではそこで活動を発表している。また、2020年度には、同ゼミにメンター役として参加し、参加者同士が活発に交流できるための役割を遂行した。そして、このゼミに参加する勤労青年たち4名から、就労支援に関するインタビュー調査協力を得て、「発達障害の学生に関する就労支援の課題」というテーマで卒業研究をまとめた。書かれた論文は、同世代の就労に悩み苦しむ人たちに対する深い洞察と暖かい眼差しがみられ、周囲の者は「何ができるか」を考えさせられる、意義のある内容となっている。

齋藤 杏奈（健康栄養学科）

運動時のスポーツドリンク摂取における嗜好の性差に関する実態調査

運動実施者の特性に合わせた練習時の水分補給方法の提案を目的として、夏季運動時の飲料摂取状況とスポーツドリンクの嗜好性の性差に関する調査を実施した結果、女性は男性に比べスポーツドリンクが苦手・嫌いであり、味を理由に上げているものが多くみられることが判明した。味覚には男女差があることが報告されているが、運動中の飲料選択にも味覚が関係していることが示唆された。

熱中症予防のためにも運動時の適切な水分補給が不可欠だが、本研究は運動実施者の性差に着目し、快適な水分補給方法を検討するという新たな視点からの研究である。

角屋 桜雪、高橋 美空（管理栄養学科）

新しい嚥下調整食への挑戦

新型コロナウイルスの流行という厳しい状況下で、パッククッキングやエスプーマといった新しい調理方法を用いた嚥下調整食を作成し、さらに、クリープメーターを用いて物性を測定し、その妥当性の検証も行った。これらの卒業研究は、単なる思いつきではない、大学で学んだ専門知識を活かしながら発想した成果で、嚥下に問題を抱えている高齢者など、人を第一に考えた発想である。

相模女子大学短期大学部発想賞

山田 夏生、渡邊 純里（食物栄養学科）

環境中からの納豆菌の分離

本研究では環境中からの納豆菌(*Bacillus subtilis natto*)の分離を目的とした。本学内ならびに横浜市、川崎市の土壤からサンプルを採取し、納豆菌と予測される細菌を分離した。その後、検出された細菌を水煮大豆に添加し、納豆にみられる粘性物質(ポリグルタミン酸)の有無を確認した。

結果として、市販の納豆菌のように大量にポリグルタミン酸を産生する納豆菌は分離できなかつたが、粘性物質を少量産生する細菌を分離することができた。

本研究において、上記学生2名はこれまでの常識にとらわれず、納豆菌の分離のため本学内外のから様々なサンプルを採取するなど、自らのアイディアを提案し、積極的に研究に取り組んだ。また、目的とは直接関係のない結果にも興味をもち、応用微生物学の知識を深めていた。結果として、実際に納豆菌と断定できる細菌は分離できなかつたものの、より高確率で納豆菌を分離するため方法や条件など、今後のゼミナール活動につながる結果と考察を残した。

以上